

漱石「琴のそら音」論

——法学士に伝えられた幽霊譚——

北川健二

一、はじめに

「琴のそら音」は、東京帝国大学英文科の学生だった小山内薫らが創刊した雑誌「七人」七号（七人発行所 明治三十八年五月一日発行）に発表され、後『濠虚集』（大倉書店・服部書店 明治三十九年五月一七日発行）に収録されている。

「切角の御依頼だから七人へ何か書いて出してもらひ度が色々用事もあるし少しは本もよみ度いからうまく時日内に出来るかどうか受合ふ訳にもゆかぬ君から小山内君にさう話して置いて呉れ玉へ」（野村伝四宛書簡 明治三十八年二月二日付）とあるように、野村伝四を通じて漱石へ執筆依頼がおこなわれた。その後、明治三十八年四月三〇日付野間真綱宛書簡で、「昨夜は五六人集つて十一時頃迄談話をしました（中略）僕は琴のそら音と云ふ小説を読んだ七人に出す積だから読んでくれ給へ」と書き送っている。「談話」とは、高浜虚子たちと開いている文章会のことと、漱石はそこへ野村、野間の二人も誘っていたようだ。

当初「琴のそら音」は、単独で論じられることはなく、『濠虚集』の中の一つとして作者との関係で論究されてきた。作品論として論じられる多くは、語り手である「余」を中心としており、常識を無批判に信じる「余」に対し「不確かな「自分の心」の動き方というものを厳しく点検しうる自己批判の眼の要請にあった」とする山崎甲一¹や、「余」は津田君との会話から〈日常〉から〈非日常〉の世界を見ることになるが、その違いを「明瞭に意識せぬ人物として設定」され、それゆえに不安を取り除くことが出来ないとする北川扶生子²などの「余」を批判的に捉えるもの。「余」の体験が「余」と津田君の関係を深めるのに役立ったとする宮園美佳³、学生時代からの友人であった「余」と津田君が、それぞれの道を進んだ後に変化した関係性からくる不安を捉える稲垣広和など、「余」と津田君との関係性から論じるもの。他に、小宮豊隆が比較する「エイルキン物語」を同様に用いた上で、「津田君が提唱する幽霊論とは、つまりは、男女が引き合う力をもって、「神秘」ととらえるものではな」いかとする小倉脩三⁴や、

コミュニケーションという視点から漱石作品を論じ、実際に会うことの重要性から非日常の現象が用いられたとする諸岡知徳、「幽霊」という狂気によって、世俗の現実を超える」とする萩原桂子など、描かれた不可思議な現象から作品を読み解こうとするなど多岐にわたって論じられている。

本論では、「余」の行動を捉えなおすことから始めて、その言動が何を示している、そのことによって作者が何を伝えようとしているのかを論じていきたい。

二、「余」と津田君

「余」は、大学で法学を修め、卒業の後、芝の企業に勤めている。最近、結婚を控えて本郷の下宿から小石川小日向台町に家賃七円五〇銭の借家を借りて引っ越した。結婚までの間、家政婦として婚約者の実家からの紹介で雇った「婆さん」と二人で暮らしている。

「刻下の事件を有の儘に見て常識で捌く。即ち現実的な思考を好む法学士であり、実業家の卵である。

一方、津田君は文学士で、現在も研究が続けている心理学者である。二人は高等学校の同級生で、その当時の成績は津田君が「常に二三番を下らなかつた」のに引き換え、「余」は「大概四十何人の席末を汚すのが例」で、今でも「余」は津田君に一目置いている。

その津田君が近頃「幽霊」を研究しているという。「此正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日迄津田君の下宿を訪問」しなかつただけで「久しく来なかつた」をいう会話が成り立つ二人は、親友と呼んでよい間柄だと考えられる。津田君は、「現に僕も其手紙を見る迄は信じない一人」であつたと「余」に語るが、このことは津田君も、つい最近まで「幽霊」などを信じない理論家だつたことを裏付ける。また「何だか此幽霊なる者が余の知らぬ間に再興された様」だとする「余」の感想は、津田君の「幽霊」研究が正月以降に始められたことを意味する。つまり「雪がちら／＼降つて寒い日」に葬式を執り行つた津田君の親戚の幽霊譚を知つてから研究を始めたといえるだろう。

「余」と津田君の会話の当初、「余」は確かに「幽霊だ、祟だ、因縁だ杯と雲を攫む様な事を考へるのは一番嫌」な存在であつた。古い師を信じ、日柄方位を気にする「婆さん」を「迷信婆々」と呼び、「若い女に崇る」と聞き、それをまだ同居すらしていない「余」の婚約者露子のことだと心配する姿を「取越苦労」と批判する目を持つている。しかし津田君の親戚がインフルエンザから肺炎になつて死んで、日露戦争で従軍中の「所天」のところへ「幽霊」になつて会いに行つた話を聞き「法学士の知らぬ間に心理学者の方では幽霊を再興して居るなと思ふと幽霊も愈馬鹿に出来な」と考えるようになる。

津田君の下宿において、「余」は「幽霊」と呼んでいるもの、すなわち精神の感応といった不思議な現象は起こり得るものだと

いうことを知る。それとともに軽く考えていたインフルエンザが、若い女性の命すら奪うことがあることを、実際にあつた話として聞くことになる。ただ、下宿を出るとき「余」は、それを露子のこととしては捉えていない。だからこそ津田君との別れ際、津田君から「夫だから宇野の御嬢さんもよく注意し玉ひと云ふ事さ」といわれた「余」は、津田君の「夫だから」が、「此頃のインフルエンザは性が悪い、ちきに肺炎になるから用心をせんといかん」という意味で使われているにも関わらず、「余」は「万一の事がありましてら屹度御目に懸りに上りますなんて誓は立てないのだから其方は大丈夫だらう」と答えるのである。「洒落て見た」という「余」は、露子に死が訪れることなど考えてはいない。「心の中は何となく不愉快」なのは、彼女が幽霊になつて自分の前に現れることの方に不安を感じている様子を表しているのだと考えられる。

三、「余」の彷徨

白山御殿町に住む津田君と別れ、小日向台町の我が家へ向かう「余」は、「盲啞学校の前から植物園の横」の坂を下りながら一時の鐘を聞く。そこから「交番の角」を曲がり極楽水を通り抜け、上り坂をのぼり「竹早町を横つて切支丹坂」を下る。さらに細い谷道を上り下り、また「西へ」と爪上りに新しい谷道がつゞく「いわゆる茗荷谷を通過する。そこから七八丁行くと、小石川小日

向台町にある「余」の家に帰りつく。その当初は先述の通り「余」はまだ露子の「死」を意識してはいない。

真暗な中、どこかで一時を知らせる鐘が鳴る。極楽水の「貧民」街は寝静まつていて、「余」に他人のものではあるが、「死」を意識させる。そこへ子供らしい棺桶が通り過ぎる。それを追いかけるように二人の人間が話しながら「余」とすれ違う。「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」「寿命だよ、全く寿命」だという会話を聞き、今まで他人の問題であつた「死」を自分のこととして捉え直す。「二十六年も娑婆の気を吸つたものは病氣に罹らんでも充分死ぬ資格を具へて居る」「人間は死ぬ者だとは如何に呑気な余でも承知して居つたに相違ないが實際余も死ぬものだと感じたのは今夜が生れて以来始めてある」。佐藤裕子が示すように「生れて間もない幼子の死から、人間は死ぬものである」という真理を思い、そして自らの死について考えた後に露子の死へと連想してゆく⁽⁸⁾のであり、「余」が感じたのは露子が肺炎に罹つて死ぬ姿ではなく、自分自身が死ぬ存在であり、しかもそれが何十年も先のことでなく、次の瞬間死んでもおかしくない存在だということである。すなわち生と死は隣り合わせで、生そのものが危うい存在なのだということを理解したのだといえる。

危うい自己の生を守るように「余」は切支丹坂を下る。ふと目を上げると「茗荷谷の坂の中途に当る位な所に赤い鮮かな火が見える」。結局この「赤い鮮かな火」は巡査の持つ提灯なのだが、「余」は「この火を見た時、余ははつと露子の事を思い出」すと

四、「余」と「婆さん」

ともに「同時に火の消えた瞬間が露子の死を未練なく拈出」する。露子も「余」と同じ人間である以上、いつ死んでもおかしくない存在だと気付いたとき、巡査と出合い「悪いから御氣を付けなさい」と声を掛けられる。それは露子がインフルエンザだと知った津田君から言われた「よく注意し給へ」と呼応する。しかし津田君の「よく注意し給へ」は、「余」に露子の「死」を喚起するには至っていない。なぜならインフルエンザから肺炎になつて死んだ親戚の話聞いた「余」は、「満腹の真面目」で「本当だね」といつているからである。この「真面目」は死んだ親戚への同情から発せられている。同情とは、あくまで「死」が他人事であるが故に発することのできる感情であり、もし自身の問題として捉えたならば、心配で居ても立ってもいらなくなるはずだからだ。

自宅への帰途、自身の生の危うさに気付いた「余」は、赤い火を見て露子の存在を思い出す。元氣な自分がいつ死んでもおかしくないならば、インフルエンザに罹っている露子はさらに「死」に近い。津田君の親戚が、その死を鏡を通して「所天」に知らせたとするなら、「赤い鮮かな火」は露子が「余」に「死」を知らせようとした兆候ではないかと考えるのは自然なことであろう。津田君の下宿で聞いた不思議な話が、「余」の中で、自分のこととして繋がった瞬間である。

「余」は津田君の下宿で「婆さん」のことを、主人の言うことを聞かないと批判する。また、占いをする坊主の言葉を信じ、主人たる「余」を困らせる。さらには近所の犬が遠吠えするのを聞いて「此辺に變がある」と騒ぐ。実際には泥棒が近辺に出没するために吠えていて「變がある」というのは正しいのだが、「婆さん」は坊主の言葉と結びつけて露子の身に何かが起こると心配する。「余」はこれも「飛んだ預言者に捕まつて、大迷惑だ」と憤る。「幽霊だ、祟だ、因縁だ」と雲を攫む様な事を考へるのは一番嫌」だと自認する法学士の「余」は、「婆さん」を「迷信婆々」と否定する。

ところが、津田君の下宿から帰ってきた「余」は、「迷信婆々」と皮肉つていた「婆さん」の言葉に押され始める。「いへあの御顔色は只の御色では御座いません」と伝通院の坊主を信仰する丈あつて、うまく人相を見る「婆さん」ずばと凶星を刺す。寒い刃が闇に閃めいてひやりと胸打を喰はせられた様な心持がする。「婆さん」に押されているのは、いままで大したことはないと考えていた露子のインフルエンザが、津田君の話とともに帰途に感じた「死」のイメージと重なって、「余」の中で露子に何かあったのではないか、と思うようになったからである。それは元々露子を心配している「婆さん」の思いと一致する。だからこそ「犬の遠吠」も馬鹿にできなくなり、そこに不安の種を見つけたくな

つてしまふのだ。後に巡査に、近辺に泥棒が出没していて犬が吠えるのだと伝えられても、「遠吠が泥棒の爲めであるとも解釈が出来る」と、それを答えたと断定できずに、あくまで不安を留保してしまふ。同じ不安を持った者同志が不安を出し合えば、答えを導き出すことなど出来ないのである。

翌朝、露子の家へ行き、「余」は露子の病気が既によくなくなってゐることを知るが、そこには津田君の「遠い距離に於てある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的变化を起す」などという幽霊譚は起こっていないことがわかる。「余」が露子を心配しているときに、露子は「中央会堂の慈善音楽会とかに行つて遅く帰つた」のだというのである。

五、「浮世心理講義録有耶無耶道人著」

「余」は露子の家を出て帰宅する途中に、神楽坂で床屋に入る。そこでは源さん、由公、鎌さん、松さんと、いかにも下町の大衆といった人びとが世間話に興じている。松さんが読んでいる本は、表紙に「浮世心理講義録有耶無耶道人著」と書かれていて、どうも狸が書いた本のようなのである。中には「狸が人を婆化すと云ひやすけれど、何で狸が人を婆化しやせう。ありやみんな催眠術でげす」と、狸が人を化かす方法について語られている。それは人が不安を感じているところを、その不安を強調することにあるという。「作蔵君は婆化され様、婆化され様として源兵衛村をのそ

くして居るのでけす。その婆化され様と云ふ作蔵君の御注文に応じて拙が一寸婆化して上げた迄の事でけす」と狸は書く。「余」の昨夜の行動は、全くこの「有耶無耶道人」という狸の語ることと一致する。狸に化かされてこそないが、「余」をはじめとして人間は、自分はまだ死なないという無意識の常識の上に立つて生活を営んでいくものだが、津田君によつて注ぎ込まれた「死」という認識によつて、「余」は帰路に見た出来事を「死」の兆候として受け止める。初めは「死」という状態について、次いで自らの「死」を考える。「死」は身近に存在していて、いつ「生」から転落してもおかしくないものだと思ふ。そしてさらに露子という大切な人の「死」へと結びついていくことで、「余」の不安は、「婆さん」の不安と共鳴し合い、確信へと変化する。

「床屋」に集まつた人びとは「幽霊だの亡者だのつて、そりや御前、昔しの事だあな。電気燈のつく今日そんな篋棒な話しがある訳がねえ」「なあに、みんな神経さ。自分の心に恐いと思ふから自然幽霊だつて増長して出度ならあね」と、幽霊を信じていない。これは「幽霊だ、祟だ、因縁だ杯と雲を攫む様な事を考へるのは一番嫌」だといった昨日の「余」となら変わるものがない存在であることを伝える。このことは昨日までの「余」を相対化するとともに、「床屋」に集まつた人びと、すなわち大衆も、ひとつのきっかけさえあれば、「迷信」や「幽霊」の世界に迷い込む可能性があることを示している。

六、「余」の内面について

「余」の言動については、多少軽はずみな点はあるにしても、矛盾はしていない。つまり、徐々に不安が高まっていき、その不安の元が露子の「死」に行き当たったとき、全てがそれに関連して見えるようになる。作者は作品の中で、この不安の高まりを見事に演出している。たとえば「余」が聞く「鐘の音」と「犬の遠吠」がそうであろう。津田君の下宿を出てすぐの「余」は、不安を「幽霊」が実在しているのではないか、という点に置いている。

一時という夜中の街は、街灯もなく暗闇であつただろう。「どこで撞く鐘だか、夜の中に波を描いて、静かな空をうねりながら来る」鐘は、「余」から近い距離で鳴ってはいない。それは津田君に「インフルエンザ」と耳元で「大きな声」を出されたときのように驚いていないことから分かる。一方で「犬の遠吠」も「いづくよりともなく何物か地を這うて唸り廻る様な声が聞える」と、場所を特定できない程離れた場所で鳴いている。

両方とも「余」は暗闇と静寂の中で、五感の内の聴覚のみが研ぎ澄まされた状態で聞いている。「刻下の事件を有の儘に見て常識で捌く」「余」は「鐘の音」を分析して「今迄は気が付かなかつたが注意して聴いて見ると妙な響きだと気付く。それは「余」が知っている常識が決して絶対的に安定したものではないことを伝える。さらに「余」は、一定のリズムを持つはずの心臓の鼓動までもが、鐘のうねりに合わせて変化していくように感じ、「今夜

はどうしても法学士らしくない」という結論に達する。そこには津田君の「幽霊譚」が無意識のうちに作用しているのである。

「法学士らしく」なくなった「余」は、家への道中で「死」を意識する。「死」は自分でコントロールできない、極めて不合理なものとして存在する。その不合理な「死」がインフルエンザに罹った露子に重なったとき、「余」の妄想が始まる。

「犬の遠吠」も、常の「余」ならば「直線的の声」だと聞き、「陽気」で「躁狂」なものだと感じているが、この夜は「陰鬱」で「沈痛」さらに「自由でない」ものに聞える。これは「余」が露子の「死」を身近なものとして感じた不安の反映だと考えられる。

このように作者は、「余」が、津田君に聞いた話から暗示を受け、次第に「幽霊だ、祟だ、因縁だ杯と雲を攫む様な事」を現実に見出ししていく様を描き出している。

「余」は津田君と共に帝国大学出身であり、開国以来西洋に追いつこうとする日本は、大学出身者にその中心的な役割を担わせていた。「余」もその分に漏れず、卒業して企業に勤めてから「家へ帰って飯を食ふとそれなりに寐て仕舞ふ。勉強所か湯にも碌々這入らない位」また「毎日芝から小石川の奥迄帰るのだから研究は愚か、自分が幽霊になりさうな位」という程働いている。だからこそ津田君に対して「此忙しい世の中に、流行りもせぬ幽霊の書物を済して愛読する杯といふのは、呑気を通り越して贅沢の沙汰」だと考えるのであろう。「余」はこのように一生懸命働

七、文学士の立場

いた結果、裕福な家庭の娘である露子と婚約するに至る。これも資本家からの期待の表れであり、この期待には、多分に学歴が影響している。作品はそういう「余」が結果的に、津田君の語る「幽霊譚」に翻弄されながらも、自らの心を覗き込み、大切なものを発見していく過程を描いている。作品の冒頭、津田君の下宿で「凡そ冷静なる判断より得たる事項の外は何ものも吾人の脳中に容るゝ資格なしと云ふは、吾人を以てたゞ理屈一遍に感じ又行動すと誤解する愚人」(『文学論』大倉書店 明治四〇年五月七日)として描かれた「余」が、深夜の彷徨で発見するのは、法律や事実といった目に見えて動かすことが出来ないものではなく、「幽霊だ、祟りだ、因縁だ」と云を攫む様な「恐怖や心配といった、感情や心の働きであり、さらには「死」を通して生命のあやうさを知るのである。これらは全て理屈で理解できないものであると同時に、国家や社会に集約できない個または個人という存在の証明であろう。「余」はそれを露子への愛情として理解していく。「余」が「床屋」で「して見ると昨夜は全く狸に致された訳かな」と感想を述べるのは、昨夜の経験が無にするものではなく、実際には何も起こっていなかったにも関わらず、不安に追われて喜劇を演じてしまった自分を、アイデンティティという目を通して、客観的に見る事が出来るようになったことの現われだったのである。

一方で、作者は「余」にこの夜の出来事を津田君に語らせている。「当夜の景況を残らず話したら夫はい、材料だ僕の著作中に入れさせて呉れろと云つた。文学士津田真方著幽霊論の七二頁にK君の例として載つて居るのは余の事である」と、津田君は「余」の話しを自分の著作「幽霊論」に掲載している。「余」の体験したことは、すでに「狸に致された」と「余」が認めていることであるし、実際不安に陥っている「余」に対して、その対象者である露子のインフルエンザは治っていて、「昨夕中央会堂の慈善音楽会とかに行つて遅く帰る程元氣になつて居るのである。津田君の説明する「遠い距離に於てある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的变化を起す」ことなど有り得ない状況であつたが、もし「霊の感応」が起り得るとするならば、音楽会で気分が昂揚した露子から届くものは、もつとあたたかくやさしいものではないだろうか。ここに作者による津田君、すなわち「文学士」に対する批判があると考えられる。

「琴のそら音」が発表されたのは、明治三八年五月である。日露戦争は前年、明治三十七年に三度の総攻撃を加え、一万五四〇〇弱もの戦死者をだした旅順要塞の攻略が成功し、一月一日に旅順のロシア軍が降伏する。三月には奉天大会戦が行われ、ロシア軍は戦線を撤退し、その後こう着状態になっている。日本の国民の関心は、ロシアのバルチック艦隊がいつ、どこから現れるのかと

いうことに絞られつつあった。すでに国内では、戦争で親兄弟を、夫を、そして息子を亡くした多くの遺族が存在していた。

日々新聞紙上に戦死公報が掲載されて、いつ自分の知り合い、身内の名前が揚がるか知れないとき、そうした出征兵士を持つ家族にとって、不安な日が続く中、新聞や小説に「津田君の親戚」のような記事が掲載されていく。その不用意さを作者は批判しているのではないだろうか。なぜならば、死の間際に霊となつて会いに来ることが津田君の説明するように、二人の脳細胞が「一種の化学的変化を起す」ことによつて実際に起こり得たとしても、はたしてどれだけの人が、そのような体験をすることが出来たのであろうか。ほとんどの人はそのような兆候すら得られずに、戦死の報告を受け取るはずである。戦死した兵士を勇士と呼び、旅順閉塞作戦で戦死した廣瀬少佐を「軍神」と呼ぶほどに高揚した新聞紙面に「霊の感応」を感じたとする記事が出ればどうだろうか。江藤淳は「それでもなおかつ、魂魄は、時空を越え、生死の境を超えて東京市中を飛び翔っているように思われた。明治三十七年五月、南山の激戦のとき、乃木大将の長男勝典少尉が戦死した際に、ひとりでにカラカラと鳴りはじめたという留守宅の静子夫人の箏笛の取手の環は、二百三高地で次男保典少尉が戦死したときも、やはりひとりでにカラカラと鳴り出したと伝えられていた。死と他界とは、写生文の範囲内にいくらでも浸透していた」⁽⁹⁾と述べている。それら記事になつた人たちの愛は、本当に強かつたのかも知れない。しかし一方で兆候を得られなかつた多くの人の

たちの思いは強くなかつたのだらうか、彼らはまだ愛が足りないのではないかと深く傷つくことになる。

また逆に、夢を見たり、持ち物が壊れるなど何等かの兆候を感じた人はどうだろうか。どのようなものを「霊の感応」とするのか基準を持たない中で、不安を感じている出征兵士の家族は「婆化され様として源兵衛村をのそ／＼している」「作藏君」のようなものである。「婆さん」や「余」のように「犬の遠吠」を何かの兆候だとする可能性を持っているはずであらう。「余」が当初「幽霊と雲助は維新以来永久廃業したものとのみ信じて居た」ように、「床屋」に集う人々も「幽霊だの亡者だのつて、そりや御前、昔しの事だあな」と考えている。彼等が「余」の陥つた状況にならないと誰が言えるのか。「幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬ」というように、専門家でない「余」や市井の人々は「文学士」を信じるしかないだらう。作者はいわゆる銃後で少ない情報の中に居て、安否を気遣う人々への必要な不安を与えかねない情況の中、実体の伴わない「余」の体験を「K君の例」として自らの著書に掲載するような津田君を始めとする「文学士」に対しての諷刺として「琴のそら音」を書いたのではないだろうか。

注

(1) 山崎甲一「漱石「琴のそら音」——出過ぎた洋燈の穂、

幽霊論——」(「文学論藻」第六八号 平成六年二月二〇日)

(2) 北川扶生子「漱石『琴のそら音』論」(「国文学研究ノート」第二九号 平成七年一月三一日)

(3) 宮蘭美佳「夏目漱石「琴のそら音」考——「余」の見た「幽霊」のもたらししたもの——」(「人文論究」第四六卷第三号 平成八年二月二〇日)

(4) 稲垣広和「琴のそら音」論」(「中京国文学」第一七号 平成一〇年三月一九日)

(5) 小倉脩三「『琴のそら音』」(「日本文学」第四四卷第一〇号 平成七年一〇月一〇日)

(6) 諸岡知徳「不在のコミュニケーション——漱石の中の〈郵便〉——」(「甲南大学紀要」文学編一九 平成一三年三月一五日)

(7) 萩原桂子「『幽霊という狂気』——漱石「琴のそら音」」(九州女子大学紀要」第三九卷第三号 平成一五年二月)

(8) 佐藤裕子「漱石とワーズワース——「琴のそら音」と“Strange Fits of Passion Have I Known”をめぐって——」(「比較文学」第四一巻 平成一一年三月三一日)

(9) 江藤淳「漱石とその時代」第三部(新潮社 平成五年一〇月二三日)

(きたがわ・けんじ 本学研修生)